

乱獲と大雪によるシカの「絶めつ」



(上)しかけ弓「アマツボ」(帯広百年記念館: 2)。
(右円内)「トリカブト(スルク)」の花。根から矢にぬる毒を取った。

必要な分だけとるアイヌ文化とちがい、和人的な商売を目的とした狩りが進むと、シカ(ユク)がどんどんとられます。北海道のシカは減っていきました。

そのため、開拓使はシカのとりすぎ(乱獲)を防ぐと、明治8、9年(1875、76)に規則を定めましたが、乱獲は続きました。

この規則では、伝統的なアイヌ民族の狩りの方法である「しかけ弓」と「毒矢」が禁じられています。ここでも、伝統的なアイヌ文化が禁じられたのです。

一方、石狩地方の開発が進むにつれ、シカは十勝に集まるようになりました。



エゾシカ(ユク)。先に石狩地方が開発されていったため、十勝にシカが集まり、さらに和人のハンターらが集まることとなった。

十勝組合の管理と和人の密猟

明治始めまで、十勝の産業(狩りや漁)については、商人による支配・管理が続きました。アイヌの人たちは商人に獲物売り、あるいは漁場などにやとわれていました。

開拓使は、北海道各地の商人支配をやめていきます。しかし十勝では、ただ商人支配をやめるだけだと、アイヌの人々がそれまでの暮らしを成り立たせられなくなります。また、開拓使も、宿や道の管理者がいなくなるので困ります。

明治8年(1875)に商人幹部6人とアイヌの代表7人とが「十勝組合」をつくりました。

十勝組合はシカ狩りや漁を管理し、発展しました。

しかし、十勝のシカについて知った和人がきて、大がかりな密猟をします。明治10年(1877)までのシカ狩り頭数は、年に1万頭弱だったのが、次の年には4万頭も狩られました。十勝のシカは減っていきました。

大雪によるシカの大量死

シカの数が減っていく中で、明治12年(1879)1、2月に大雪が降り、エサをとれないシカが大量に死にました。

和人の狩りは開拓使により禁じられましたが、守られません。

さらに、明治13年(1880)に十勝組合が解散し管理が弱まると、和人のハンターや毛皮商人が入りこみ、あたりまえのように密猟がおこなわれました。(p158)

明治15年(1882)の早春に、また大雪が降りました。雪に足をとられたシカは、ハンターに殺されたり飢え死にしたりして、とても少なくなり、絶めつ状態だとまでいわれます。

エゾシカという、アイヌ文化を支えてきた大きな柱が、あっという間に少なくなってしまったのです。



冬のエゾシカ(ユク)。川に落ちてはい上がるうともがいている。
(写真: 『十勝川写真で綴る変遷』より)

2 帯広百年記念館(おひひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155 - 24 - 5352 月曜日休館
3 密猟(みつりょう): 法律などのきまりを破って狩りをする事。

4 絶めつ状態(ぜつめつじょうたい): 明治20年(1887)には、北海道全体で1千800頭しかとれなくなった。